

認知症ケアの向上及び制度改善を図るための全国研究集会開催事業

公益社団法人 認知症の人と家族の会

〒602-8222 京都府京都市上京区晴明町 811-3 岡部ビル 2F

助成事業の概要

全国研究集会は、全国各地で認知症の人と家族への援助をすすめている活動を報告し検討し合うことでケアの向上、および制度の改善を図ることを目的とし、1985 年から毎年開催し 34 回を重ねてきている。本集会を通して、医療・福祉関係専門職は、認知症ケアだけでなく当事者の思いを学び、認知症の人、家族は、認知症の専門知識を得ることができる。また、医療・福祉関係の専門職を目指す学生も多く参加し、将来のための学びの場ともなっている。

これまでの集会等では、認知症の人がたくさんの方の前で苦しみと不安、そして希望や前向きな考えを語ってきたことで、ようやくその思いが広がるようになってきた。

認知症の人が思いを語ることができるということが、多くの方の共通認識となり、その声を聞いて施策もつくられる方向になっている。認知症施策推進大綱では 5 つの柱をつらぬく共通の理念を“認知症の人や家族の視点の重視”としており、施策をつくる段階から認知症の人とその家族の声を聞くほど、大きく認知症に対する意識が変わってきたのは、このような集会を重ねてきた実績によるものである。

事業の成果

各セクションにおいて有意義な講演・事例発表が行われ、認知症への理解と介護家族への支援がいかにあるべきかを考える機会となった。それぞ

れの内容は下記の通りである。

■認知症になっても普通に生きていける

基調講演では、メモリークリニックお茶の水院長、筑波大学名誉教授の朝田隆氏が「地域感覚の認知症ナウ」と題して、予防と共生について、先生が出演されているテレビの映像・実技を交えてのお話をいただいた。「認知症」を過度に不安がるのではなく、「なんとかなる」という希望をもって、気楽にいくこと、楽しくって癖になる＝交流、愛されたい、感謝されたい、役立ちたいは“生きがいの元”。“予防”で言われるこれらのことは、そのまま「認知症になっても、社会交流の中、尊厳をもって普通に生きられる」ことにつながっていると、締めくくられた。

■多様で、意欲的な実践報告に共感

事例発表は、4 名が発表した。愛知県の三嶋ゆかりさんが孤立しがちなシングル介護者が、支部におけるシングル介護者交流会でつながりあい、大事な居場所となっていること。広島県の入野輝雄さんが、認知症の人として多趣味、行動的な生活を多くの人との交流を持ちながら過ごされている日々について。杏林大学（東京都）の馬場美彦さんは、小規模多機能で、地域での多面的な交流や取り組みが利用者の機能向上に影響を与えているという地域リハビリの研究報告を。神奈川県支部の三橋良博さんは、若年性アルツハイマーの奥さまの介護の日に、地域、多職種・関係機関とともにできあがった地域包括ケアの体験を報告され、それぞれ大変興味深いものだった。

■多角的にこれからの認知症とともに生きる社会を語り合う

シンポジウムは、高見国生「家族の会」顧問がコーディネーターとして、シンポジストに当事者、介護家族2名、厚生労働省、つくば市、医師、高齢者施設長、「家族の会」副代表の8名が登壇された。「認知症の人とその家族が地域の人と共に生きる社会のために」というテーマに沿って、意見発表をされた。筑波大学認知症疾患医療センター部長は、病院内だけにとどまらず、地域のカフェに出かけて、直接ふれあう機会を持っていると話され、また会場から、仕事と介護の両立の困難さを訴える発言があった。

行委員会体制をつくりすすめられ、医療、介護、福祉の関係者、行政、自治体職員も加わり、本集会をきっかけに結ばれた関係が地域連携へと広がっている。今後も引き続き交流の場を持つことで、認知症関係の情報共有の場として機能していくことを期待している。

今後はこの茨城の経験を活かすとともに、より多くの人に研究集会を知ってもらう事や、新型コロナウイルス感染症対策の観点から、Webによるライブ配信など、「新しい生活様式」や SNS を活用するなど、時代に対応したものとして展開していく。

成果の広報・公表

地元ケーブルテレビ（研究学園都市コミュニティケーブルサービス (ACCS))・新聞を通じて報道されたほか、報告書を作成し、関係団体などに公表される。また、PDFによりホームページでダウンロードできるように公表される。

また、「家族の会」会報（19,000部発行）を通して、介護家族や関係者に実施内容を伝えた。報告書では、発言内容をすべて書き起こし、パワーポイントの内容も掲載したものである。ホームページ掲載後は、当会の Facebook や Twitter を使って関心を持つ人たちに伝えられる（6月中旬更新予定）。

今後の展開

この研究集会は、全国的な課題や、時代に合った重要な事項をテーマにしているため、関係者の関心も高く、この場で学んだ参加者が、各地域で実践を行う事で、認知症ケアの向上に貢献する。

また、参加者、関係者同士の情報交換も大きな成果に繋がっている。開催地である茨城県では実